

令和元年6月19日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H02944

研究課題名(和文) 日米医学協力計画(1965～90年)とJICAによるフィリピンへの医療援助

研究課題名(英文) Japan-US Medical Cooperation Program and Medical Aids to the Philippines by JICA

研究代表者

飯島 渉 (IIJIMA, Wataru)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：70221744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,700,000円

研究成果の概要(和文)：東西冷戦の下で進められた日米医学協力計画は、寄生虫疾患、特に東南アジアにおける日本住血吸虫症やリンパ系フィラリアの制圧のための調査研究を、日米の寄生虫学者が共同して行うことを目的としていた。日本はそうした感染症・寄生虫疾患の制圧をめぐる豊富な経験を有していたからである。事業に対しては、米国の東南アジア戦略への協力との批判もあったが、小宮義孝や佐々学などの寄生虫学者はこの計画に参画し、日本の経験を制圧のための知見とすることに成功した。日米医学協力計画は、医学や公衆衛生の領域での調査研究を主とし、実際の医療援助を担ったのはJICAであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日米医学協力計画が蓄積した基礎的な資料は、国際保健の領域において活用することが可能な貴重な疫学的知見を含んでいる。本研究計画の一環として、こうした資料を保全・整理し、その一部は目黒寄生虫館に移管し、また、長崎大学熱帯学研究所などとも連携して、疫学的な資料の利用のための条件を整えた。

研究の過程で、台風によって被災したレイテ島の日本住血吸虫症の制圧に関わるJICAの資料を修復し、これをレイテ島に返還した。この作業には、東日本大震災で被災した資料の修復を援用した。このことは、歴史学がその固有の方法によって新たな研究貢献を行うことが出来ることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of the Japan-US Medical Cooperation Program was to encourage the scholars of both side to study the control methods for infectious and parasitic diseases in Southeast Asia such as schistosomiasis and lymphatic filariasis. Because many Japanese scholars had rich experiences to control these diseases, the Program played an important role to share academic intelligence between the scholars of both side. Some scholars in Japan criticized the activities of the Program because the research works had close connections with the US foreign policy and military operations under the Vietnam War. But, Dr. Yositaka Komiya and Dr. Manabu Sasa, leading scholars in those days joined the Program and tried to advance their studies.

The scientific research was organized by the scholars in this Program and the medical aids was actually organized by the JICA, for example the anti-schistosomiasis campaign in the Leyte islands, the Philippines.

研究分野：医療社会史

キーワード：日米医学協力計画 日本住血吸虫症 リンパ系フィラリア 熱帯医学 寄生虫学 国際保健 小宮義孝

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1965年1月、ワシントンで開催された佐藤首相とジョンソン米大統領による日米首脳会談において、日米医学協力計画を実施することが確認された。これは、東南アジアを主な対象として、日米両国政府および関係の研究者がマラリア、コレラ、住血吸虫病、結核などの感染症や胃ガンなどの疾病について、医学や公衆衛生の領域において研究協力を拡大することを目的とするものであった。日米医学協力計画は、その後、形を変えて現在でも継続されている。本研究計画は、寄生虫疾患の制圧をめぐる調査研究を中心として、日米医学協力計画の歴史的な意味を明らかにすることを企図した。

2. 研究の目的

日米医学協力計画については、これまで歴史学や科学史の研究対象とされたことはほとんどなかった。そこで、はじめに同事業が蓄積した基本的な資料を確認、収集し、関連の研究史における位置づけを確認することを目的とした。次に、寄生虫疾患を中心として日米両国の研究者の共同研究の軌跡を明らかにし、日本住血吸虫病やリンパ系フィラリアをめぐる具体的な調査研究活動がどの程度の成果を上げたのかを医学や公衆衛生の研究者とともに検証し、さらに、日米医学協力計画の政治的な背景を検討することも目的とした。それは、日米医学協力計画がベトナム戦争などの東西冷戦体制下において、米国の東南アジアへの軍事的な関与への批判をやわらげ、同時に、非軍事的な手法によって、日本の国際的なプレゼンスを高める目的をもって開始されたと考えられるからである。

3. 研究の方法

本研究計画の開始時期とほぼ同時に公開が開始された外務省記録を分析し、一次史料の分析を通じて、日米医学協力計画の準備、実行段階での問題（主として財源及び事務局の主管をめぐる日本政府内部での対立と調整）を明らかにした。具体的な対象としたのは、『日米医学協力委員会関係 第一回会議関係』や『日米医学協力委員会関係 第二巻』などの外交文書である。次に、寄生虫部会が実施した調査研究、特に、日本住血吸虫病とリンパ系フィラリアの日本における制圧過程の調査研究とその東南アジアへの応用に関して、実際に調査研究に従事した、小宮義孝（予防衛生研究所）、佐々学（東京大学伝染病研究所）、片峰大助（長崎大学熱帯医学研究所）などの調査研究論文および関連機関が所蔵しているフィールド調査の記録を含む一次史料を分析し、日米医学協力計画の政治的な意味および疾病の制圧への具体的な貢献の程度を検証した。

4. 研究成果

日米医学協力計画は、1965年1月の佐藤・ジョンソン会談によって、日米医学協力計画委員会（合同委員会）が上部機関として設置され、そのもとで、コレラ、らい、寄生虫疾患、結核、ウイルス性疾患の5部会が設置され、日米両国の研究者が定期的に会議を開催する形で進められた。このうち、寄生虫疾患部会が対象とした日本住血吸虫病は、20世紀の日本が制圧に成功した寄生虫疾患の一つである。小宮などの日本の研究者は、第二次大戦以前からの対策を基礎として、米軍占領下、GHQなどと共同して対策を進め、溝渠のコンクリート化による宮入貝対策（山梨メソッド、あるいは小宮メソッドと呼ばれる）を実施し、他の流行地であった筑後川流域や片山地方（広島）でも制圧に成功した。

日本の経験は、プラジカンテルの導入以前に制圧に成功したという意味で、世界の住血吸虫病対策や寄生虫疾患対策の中で、きわめて特徴的な事例であった。そのため、その知見が、日米医学協力計画でも取り上げられ、その後、JICAなどが進めた医療協力プログラムでは、溝渠のコンクリート化に象徴される日本の経験がフィリピンなどにも導入された。日米医学協力計画は、こうして日本が制圧に成功した寄生虫疾患にかかわる知見を日米両国の研究者が共有し、これを東南アジアなどに応用するための学問的な基礎を構築する役割を果たした。

他方、日米医学協力計画をめぐるのは、日本政府内部でもさまざまな調整が必要であった。日本政府内部では外務省が主管し、医学研究という内容から、厚生省と文部省がこれに関与する体制がとられた。しかし、本研究計画が外務省記録の分析によって明らかにしたように、事務レベルの責任をどの省が担当するのかという問題は、それほど簡単ではなかった。外務省と厚生省の合同会議では、「厚生省は人手不足もあり、また研究者との関係も必ずしもうまく行っていないので、どこか他の機関を定める必要がある。しかし具体的にどこにするかは成案はないので外務省が間にたって調整してもらいたい」という意見が出されていたほどである。

また、研究者の間でも、日米医学協力計画への批判があった。その背景には、日米医学協力計画が医学研究にとどまるのか、それとも東南アジアを対象とした医療協力を踏み込むのか、をめぐる考え方の違いが顕在化していたことがあった。当時、日米医学協力計画に関して新日本医師協会などの日本共産党関係の医療団体が反対声明を出した。また、外務省記録の分析から、日米医学協力計画を厳しく批判していたのは、日本ウイルス学会であったことが明らかになった。日本ウイルス学会は、1966年1月5日、日本学術会議（議長：朝永振一郎）に対して、「昭和40年11月11日の幹事会において出席者全員の一致により次の結論に到達しました。すなわち、「日米医学協力計画」にはその性格と成立の経過に関し、多くの疑問がもたれる。こ

れは我が国の学術体制の正常な発展と、ウイルス学会の将来の活動をさまたげるおそれがある
と考える。この問題は医学だけの問題ではなく、我が国の学術研究体制一般のあり方、国際学
術交流体制のあり方の根本にふれる極めて重要な問題と考えられます。その意味で学術会議が
本計画の全体について根本的に検討を加えられることを要望します」との声明を出した。日米
医学協力計画をめぐるこうした学会や研究者の間の対立は、日本の研究体制そのものに関係し
た問題であったことも明らかになった。

研究資料の整理に関しては、国立感染症研究所の書庫に保管されていた小宮義孝の日本住血
吸虫症に関する調査研究資料を整理・保存し、その一部を目黒寄生虫館に移管し、広く利用で
きるような状況を整えた。また、資料目録は、本研究計画に係るHP（後掲）を通じて公開
を開始した。リンパ系フィラリアに関しては、主として長崎大学熱帯医学研究所が保管して
いた片峰大助の調査研究資料を整理・保存し、長崎大学とも連携をとりながら、その利用のた
めの体制を整えた。また、東南アジアでは、特にフィリピンのレイテ島の住血吸虫症センター
に保管されていた日本住血吸虫症に関する研究資料の保全に協力した。これは、レイテ島を襲
った台風によって被災した研究資料を、東日本大震災ののちの資料修復の方法を援用して、修
復し、レイテ島に返還した資料保全をめぐる活動である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

飯島渉、A Hidden Journey of Insect Flower: Globalization of Pyrethrum in the Twentieth
Century、青山史学、査読あり、第37号、2019、1-6

マレーハイン・門司和彦、健康の人文学、査読あり、日本健康学会誌、第85巻、2019、3-5
Sato Marcello Otake, Sato Megumi, Moji Kazuhiko, Taenia solium, Taenia saginata, Taenia
asiatica, their hybrids and other helminthic infections occurring in a neglected tropical
diseases' highly endemic area in Lao PDR, PLOS Neglected Tropical Diseases, Vol.12,
2018, 6260-6260, <http://hdl.handle.net/2433/230550>、査読あり

千種雄一ほか、千葉県小櫃川流域における日本住血吸虫中間宿主ミヤイリガイの生息地の変
遷、衛生動物、査読あり、第69巻、2018、19-29、<https://doi.org/10.7601/mez.69.19>

Ogawa, K. and Shengfa Liu, Identification of blood flukes infecting tiger puffer *Takifugu
rubripes*, Fish Pathology, Vol. 52, 2017, 131-140, <https://doi.org/10.3147/jfsp.52.131>,
査読あり

S. M. Otake, M. Sato, Y. Chigusa, K. Moji ほか, The role of domestic dogs in the
transmission of zoonotic helminthes in a rural area of Mekong river basin, Acta Parasitol,
Vol. 62, 2017, 393-400, [https://www.degruyter.com/view/jap.2017.62.issue-2/ap-2017-0047/
ap-2017-0047.xml](https://www.degruyter.com/view/jap.2017.62.issue-2/ap-2017-0047/ap-2017-0047.xml)、査読あり

〔学会発表〕(計5件)

飯島渉・市川智生・井上弘樹、感染症アーカイブズと歴史疫学の世界 寄生虫症の制圧をめ
ぐる資料の整理・保存・公開をめぐる、日本寄生虫学会、2019

飯島渉、感染症対策をめぐる日本と東南アジアの医療協力 日本住血吸虫症を中心として、
第88回日本衛生学会学術総会、2018

飯島渉、Historicalization of Tropical Medicine: Archiving of the Basic Materials of
Japanese Tropical Medicine and Parasitic Disease Studies、日本熱帯医学会、2018

飯島渉、日本におけるマラリア制圧過程の歴史的検証 感染症データのアーカイブ化の問題、
第73回日本寄生虫学会西日本支部大会、2017

飯島渉、「感染症アーカイブズ」の構築に向けて 熱帯感染症をめぐる研究情報の整理と歴史
化の試み、日本熱帯医学会、グローバルヘルス合同大会、2017

〔図書〕(計2件)

飯島渉、清水書院、感染症と私たちの歴史・これから、2018、92

永島剛、市川智生、飯島渉、法政大学出版局、衛生と近代、2017、276

〔その他〕

ホームページ等：<https://aidh.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：門司 和彦

ローマ字氏名：(Moji, Kazuhiko)

所属研究機関名：長崎大学

部局名：熱帯医学・グローバルヘルス研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：80166321

研究分担者氏名：千種 雄一

ローマ字氏名：（Chigusa, Yuichi）

所属研究機関名：獨協医科大学

部局名：医学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：20171936

研究分担者氏名：小川 和夫

ローマ字氏名：（Ogawa, Kazuo）

所属研究機関名：（公財）目黒寄生虫館

部局名：その他部局等

職名：館長

研究者番号（8桁）：20092174

研究分担者氏名：市川 智生

ローマ字氏名：（Icikawa, Tomoo）

所属研究機関名：沖縄国際大学

部局名：総合文化学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30508875

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。